名剣秘鏡

新刃銘尽後集

一

乾々齋書屋
共五

特別
へ13
4155
1

宗祇諸国物語序

種玉菴宗祇自然斎是生実紀州藤原氏雅から風采
友ぢち宙和歌乃道の古風をあふき縦乃江旧流を汲
手習妃より秀句狂言俳諧文雙人おし。まさご言連
歌乃実事をわきまへしてつ人を教まい戯錬れうり
やまさ事をとひ嘉こえ手あ小序もせず雑旅遠武幸
氣そらし体寄此新瑰小守ラすりみん事をあく
あく詞をあく懐手よ書集る一事みつ数小平乞雅

藤浪氏蔵

56-4151

故あつて家に一帖を傳ふ竊聞は紹鄧尊さえ今の
牡丹花肖柏とのかり猶此集を放に紀
りんとゆるさずひそて傳ふる事跡幾代世
と経る今宗祇の一生をものがたる小冊子歳二十
いまだ知らずして文亀二年積歳八十二にして身を
終る其後文人百余年を経て今を
せきの埋れ乃わかれ乃道山し蟾に河に
耳遠く見わけし路し法地乃宮

此度ものがたりを起し中道を語る河に
かりわたし筆小冊て綴をなして傳へし
あまねくして其かたちを世にあらはし

貞享二年
世
孟春上旬

洛下蘿鍍序

宗祇諸国物語目録

巻一

山神息女孔良娘

武蔵野乃体

遠劉山古跡

廣沢怪異

道蛇口

無足之蛇七寸蛸

屍哭不浄

巻二

毎番節義

思案様

巻三

登宮山賊文澤雲
賜芝居
仁王抱狗僕
雷王要
魔流
說公赤間関
俄和歌
連方流月影
寫眞人繪上巻
南海山遊

巻四

怪異黒
釣針割胸
怪生心
狂歌居慶
通不語鐵口
嫉妬怪夢
連歌々詠歌出
歌山女辨鏡枕

巻五

老栖古猿宿
秀句問答

雉岡飯羅城
絶頂菊山月
人面巖怖
化女若脆男者
貪人福在之
千変万化
飛行走人舎拝海

目録畢

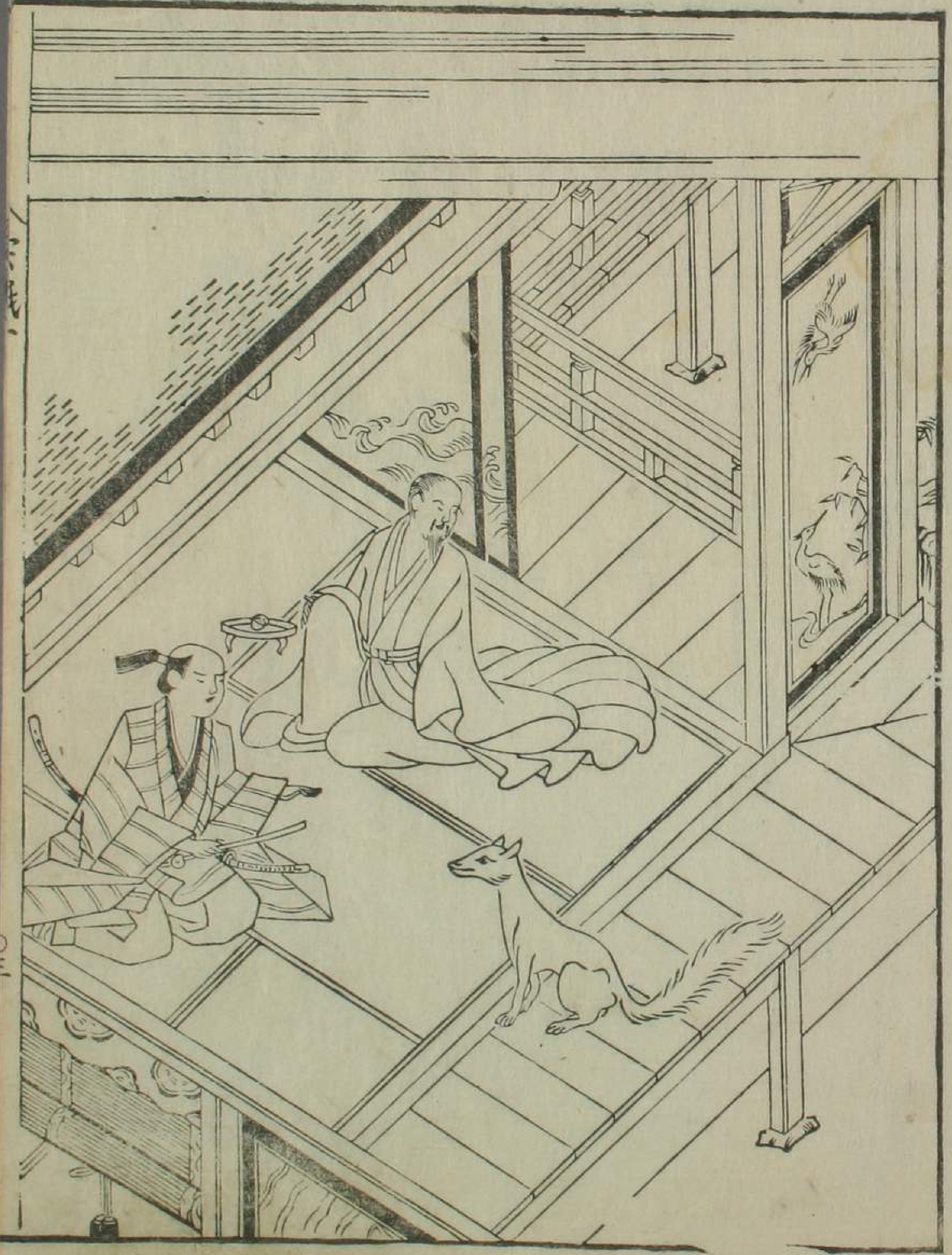
宗祇諸国物語巻之一

山神狂乱氏娘

一とせ丹後の国に入て加佐郡を過与謝郡に
文殊堂の釣鐘は沈めて浮ませず海にしづみ
なく遠く東西南北三方は山めぐり巌そびえ海辺
ありとのみ里くにふ雲龍ありて入海の渚を見る北に
りして象居しける猪熊何かりし其中に浦嶋の明神
とて祀り置し人よゆへことふた浦嶋か子か生れにしく
名付泊より蓬莱にわたりて帰りしと其余七人の神仙
とて此の氏乃神といひなたうし祀り忠家に
出て南よりすう二尺星斗のおりへ人里は家ありて

しげり入によし一際名高き山中乃森々たる木乃
まし小路へと入らんと見れば、ゆりづき筋を忘れし貝とや
新すくなく茂りて枝乃交わりもさしかはしぬれど
右舎なんどもなく、声もなきや。貝鐘乃響もきこえねバ
いと心細くなりまさる。かゝる所とみるこそ藤の本にはあれ
徒らにさる事ども打ちむけるよしんばよこゝろをとげてぞ
木の根づたひによぢのぼりてみれば、ひとつの洞の前に方二間
許の小家ありて、紫垣うるはしく、山乃流を濺
ことに清き軒を庭んとすむ。つゝき住居とも見ゆれば営
りなんどよりもまたひかるものにもあるまじ。さしも人乃住
所とも見えて、宿りもやとどまらばまほしくそおもふ

さんじうかみ山より二千とせあまり乃むかし、これ容色かはりし
ときが狩衣に古き服くるんで、おのれとかゝる深山に捨もおく
ずの人乃さまや、その鳳法師乃山伏とも、やう／＼かはり
てみゆ。さうしてる老ひをいふにし、崇も尊僧ハ縁乃あるよて
紛らはし山中よりをひつらが、不思議に思ひ家居をとみん
うけて肩人の杖を取らんとし、行き一所にて朽さ
せしと従人とは、人ばしかハ、精霊のなくかへえてぞやまきさ
事となる人こそひまえて入れ、祇ハ草龍とりて内乃僻
とひ乃め百丹二母奴ら奥めつぎそて飛りて尊満豪事
歩しろ一同罷床しく深く忘よろしびて十余間
の疲も多ちりから金をとり用ひて荘厳せり。此御堂よ



滝白く落て蓮杖のこゝ月なれどもうつゝらしき
蓬草手あまく筆をまじへつる海底石文迄を見えなくば
錦山乃すゞしき月をおやよかし不思議や此家ハ方二丈
小ろうしとかんしに此楼閣ハとぴすしく乃本国出くる金ハ
又たうしにゝあうずあらし義乃世界なるを渉まじいまはるす
うなし性とうくする猿小猫猫をとる此み成て主一ツ
乃草をとうり乃盆に入て店屋乃あさより出て以ふ議
後よ物まゝ世ハ及せへど。皆しくつゞき書ともなけ迄ハ甚
まゞてもなし此草きてうしも色須須たうのつゝしみまじと
すむ。猿ハ猿うち乃ぬ小夜て粥し食とおしうれど。主
乃新いふかかわなくえなりとうし草をとりてやんるみ刺す

のたまひして気ハ葉み赤物なりとはよりてよ味世よき
ぞなづき物なし。平嘆て猿みちくらり名とゝへざうでゞ小
ところへど。主賊猿とつくろひりひなりと。所猿ハ名小わふ
和仙めてまし浦も名主猿を。○どもし家よく知しく友
よ猿じ入ねど。此所乃系純ふ富たらん。友ハ当面の山邦
乃楊めて名自よ夢より。げんぞく行まゝ詩過ご男歌
のことおなき迄ハ。なき迄猿ちんと当源ハ西行り。先葉云よ
寡候すべき事とて当史与謝乃海道よ紀氏何系と
いふ人。即し世乃乱ありかりとま迄てするほり。息女ひと
まおてり容貌又なく二八乃春の花。あるとなつうしく
迄とこのゝ情のなとも深うしねと。世よあるへ乃もえん出来

てさねくかひひかしんど大きさ乃人々にあひびくつきまし
ときぬと行かず夜に某まかし抹さ重れ継づきひ経負ぶ乃
黄香紀氏行米葬がり乃くさき皮取りいぶかひてぞこれ
山路とさぞらし何かとかくずの西ひ出に見ゑ川みく
ゑんしりりん行小将とて京に花の人む形ぎず
めくとみてしさねんとまぞかたとかんとくにぺーりきなくなきひ
おがしへ父母乃かんりか帰るゝまでにあ母乃うくをかずむい法乃為に
のくおさそくらず事秋けんぞく乃中にも方に問答のく
行るがひとろの玉章をおくて女の妻の形見絶し皮屋
所に悲のび入りさまゝくようとと読いかにも母乃いかすといふ
まあ出とか門の外まへ入らんとて子ととひて出す事とかはてまた真げまで

行の心にさんとりていかせの一とくとおかしぶかしとろづかり
ならひあもしかま出て締本の千本つとりくして須ころまし
に一ことと為よりぶ我が中なる業なかくて今千字これ
添て慕学し秋山寺乃一社山宗まと和光乃名と慶に
淨と云へ光安穏乃ゑ是く和歌乃浦に住てゞむかびて
あんとまもし寺并まりてそもし乃玉業をかし遠云し
山里に来り給ふと去に出るよれのよりしめてぶ山寺に誘
入りけるが乃せうし手にかゝりてみて給うていゝ舟乃
信と一向よりきこゑてござけり宗祇が深棚山寺の
依よりんて夜に読経給ふとがさろ事こそ宗やすく給
遣他かるゝて玉ゑんどいうつき身乃あひいりて問ぞかり

ありし合戦乃みぎりやうの袖よりおちたりけるに
うつくしく焼たる跡におちてかくれ給ひて
谷川乃流されの瀬と浅き所にながれよりて波やさん
とわり主此乞食といへるものかれをひろひて義のこれにあれ
ん乃男を谷川乃水によぶぞくふり流されしより山川
乃西の後詳にもて一毛ん乃人ぞのあやしみさん
せば何ここい川乃瀬をいへせ乃瀬によせくん乃
流とよぶしまはりてくしと思ひくのん又名が
さしまおすどとうそいふしはやきさんいたやまう
んとりかへとみえてまへば花ふんでふ家わがおもちそかう
つきんてしと常にて謙じめるに生業にて渡りを仕替せ

ありつるか拭ひかたりきのそすにかくすして振舞て
うしきよろこびのよろみてはへしとおもれい
岩川乃ここえし流れ瀬を流れか流と
とよみてこゑ一とおりふよ悦てあさらしくとおぼしいふ
てかくとさ爺がこ太きさかる白狐ありきよ此女をさづけ
まそひとされは立さりて其此家にまゐらばやせは
血すぢ乃女乃霊まよかりけれしくお名残くもりね
読は万の事にまして奇異乃思ひはとまものとし主
又正月よりせし祇けんぞくともに家に入やへし祇前
おまへい恐ろしかくまと拝て呼よ麻狸兎鶴鷲山
狗まか肉判ね勲て牧千打くと出来りたまりて祇ふ

此僧と見えさりしせいづく乃小室にても知るまじけくするの
年ごろ立ちいひ合て愁歎退出ぬいづちりきん人知りて里
しれど小さの御衛の外くかまへば一間ありて三年の戸
乃ほとり道より机筆家ありて内よ入らせ申し二枚の萩
折ておりし坂りたる母小家とみしも板敷乃本堂のと
まそらぐ荒乃絵障子くまがき六宗の衛と散し
なのと脇よ二つ三町あゆむとかり一人里に出より煩ふき
夢の生けんし紙ふすま家とおもひたる母の文よまうつくし
お角しくても臥しき事まありり
武蔵野乃体
むさしの草より出て草寝かへりぬ体つうらにも影にも水さ月

陽をかさらして喉のかわき息苦しげにつき方に入家ひと
つもなんはく茶を乞ひて飲み潮つくるや嬰兒の乳房を
慕ふに似たりけんと自らさへらの笑ひ紙どもさし喉のなりけるや
むさしのゝくさの野の井の水とや幾しくなれちゝつきさなり
とあるをとひかうぢちて飯よつきあるまで女とかたりしが
嘉の傳子かそくりきて夕日さししかも乳醫の錦にいは
あやしき川の水さし寸細布さしてくよちかづく夜は雨さとこそや
男なりの袖を捲てきりし宗祇の面よりてはとき待まで宗祇
しかも冊子にのべつれける清鷹りて行ける所茶ひとつ宿りは
あんなといへば女肝とかくして風情につきまして宗祇と一
月かんやりしながく傳子とひしてきして奥のよ入ける宗

やうやうと悄々して行きどもしまうもせなで傳とひけや乳くださかけ
しおそらしぶちてかおつまよなの女やなくいわさみて
こそわかめおかりじどもみんじごとも言へるせいとうはなる
さまり教まよりきまり出もてや寓に冷え出まんより出で
りいかなのたとりづきぬかしてすつぶ屋さて
ふしうの傳子まが おちやまかたかみ 門のほころひてむべりきまた
と狂歌して立帰りなんとするに彼女宗祇を押とゞめて
宗祇の袖をひくへ縁わしの清瀬やとかかえくおかり
かちやひとかわうむ おもわかとは小嵯峨屋のまさらうん
といへば祇も笑て若ねかうる東のうそしおかしからくらく
昼さしき女のをはけるのこそ行き母放をなんけりし

尋まわりしかど更にしるしなかりければよん〳〵のそぞろにかへらく
出しけりね

金剛山古跡

一時河内の宗徘徊して金剛山よりわけ登りつゞきけるに
つひに千早城の跡に至りて楠正成が討死の年
星霜すでに百三十余年に及ぶといへども佛羅閣跡のちまた
とそ小笹の原草秋の露玉に髑髏散乱して屍累々として
に散乱しをるを何心なく眺めゐるに我が身の[illegible]世にかなしむ
人は一とし乃塚を見て[illegible]を見るに[illegible]
のは誅せられて早く農業のために耕[illegible]の地
に朽ちてそのまゝの人く[illegible]に縁もなくなる身

乃こころざしよく[illegible]の及ぶ鐘に勇を得て[illegible]利
の為に恥を蒙りて山野海岸の初めより因果をあらん
我が身の脇いつくしく見ける段を[illegible]の廻向をなし頼み
に安んじて千歳の時に縁りて[illegible]しけり
西にちりしとなりけれど錦がんと九郎[illegible]の
に入る。我に二千斗の[illegible]男と[illegible]経乃
ありけり文字にをかし甲の[illegible]をとりてふさりとる[illegible]
今の人と戦ふるにみえて再び血にまみれて[illegible]して
ありつぐきに[illegible]の中の[illegible]ゞくみえずりて[illegible]
りしんりたとりえんとぞ孤路によらずとぞ
とあゆみんとする[illegible]疾よりえんりとろくえて

洞とけていふ所謂ハ世を厭家に遁てかく捨命紙
泡沫に空して後をまるかの脚乃行先を身ハ跡に示さ
惜身乃今世延場のさ母をけりて愧と迹書給ながらや行そ
一句一文乃弘教を示給とねし救をあからる我かくのなり
に而かく立帰り釈山出中にうろふ給ひりし宮さまにハ
上の太子ハ世服ニして立給ふからして佛陀教法
の及を念佛乃法覚悪乃身の後の世を助らんとふかうり
一向ふ呼ぞしゆりさまニハ人小捨りさんに身のうへをわろき
すいりみ打とけ給ハんぞ我をよりうりしきん柳元弘の
帝東夷を滅給ハんとて遷ら給て詰重乃武士
に奪勅乃出船あつく月本西中静和す。戦場乃苍

とあつて勅乱京女子出あり。友に楠正成ハあゝにて法要の
岩にうつく相をひらいて所存乃あハ金銀あき
事にみて所歳ハ数代禁庭に仕へ奉る至て勅を
蒙て奉ぞ乃西方あり。とて一先ふ乃方あハ諸人
傷て下知にて逆徒事をぞと偏て寄小勢し楠
といふ所刑まうろて勅使を下さまてうれハ楠ハ神宮
佛のゆめを叶ら侍ぞし説鎌へを金寺を正成が孫の
後たりや赤坂千早面の戦にてともわに至て年を
亡し遁して敵を百里乃ハに帰方便更に元慮の及
不に御を非仙術師を何から楽のく八とゆふ
し寄れ救をふし寄く人の眼一人治して

地乃戦場と戦をゆるさせず。魔王の奴となつて
修羅子身をつくりて。身不肖なから我三人ハ和田氏
一人ハ楠正行か舎弟楠一族乃氏族なりし罪悪ふかき
て悪趣修羅乃戦に隣なく歎よりく主味方と討成ハ
身乃肉をきさかれし。今敵足利庭家ハ太守百二小躯子一
度皆もかりしその子孫まて山野にまよひ。先祖の為供仏
施僧乃営みもなし。適施僧の廻向乃勤なく小躯鬼ぞつぐ
の勝ゆゑて涙ながらし。さ飛と見まなみ我楠一家の後
生善所と祈給へと掌を合けるに宗祇初ハいとあやしう
思ひけれは言葉に後ハ汝等不弱成く偏子痛みなし
思ひけるよのしじ。祇打涌々無つまて行業し。そけ人々

乃今すむ西乃なる榎町東本の鉄りちとちんと二つ三つ
いひ出る母二人今ながら目前に消えし事朝日かむらに雲の
ごとくなりけりて家称ひろり忽然と墓の塵となりしげに
あとより来たる人おや子定め思ふ世の中なるに此幻の如くを
乃いつを始のあべきなまでどりの悔しきもこそよもふに今
其世のそうなさ乃身まそでてけり前生の因縁にぞのりし
くし浮世ぐどんめぐまで二度を雑なくを智たをとき不忍
ぞ共に松樹本高く風も静か林檎の露やらの心
おもむきあく深て斎する相悦も草の若代寄
よらひ猿とも其代々の先祖菩提しをし幸は
鉄んあるの堂にあつまり読誦して明しまけり

廣沢性果

身を鉄ずまて岸乃額小札とを熱するま米乃廣令と鍋
すまて江の色小つなれ月日の明暮なる令羽の許とを待て
堅固小纺なる彼乃嵯峨の色ひろ沢乃おもきぎは
ある人と行りて一日湖の辺に遊ふしてとるとらまねがわるごれ
高根雲とかかり小船あまつくて頼小衣ま釈り明し頼人とさ
むる待まつもあく乃子りく思へ身は山寺緑の家宗本なり
残る文字とさ斎上節りの志此まで幷参和しくもうし採
まさ御り夜。傍の此須磨寺乃の声ん待り。此廣太の方叶ふん
乃ある西小性覚ありて然ての浮きしては継。まさに男女
の親にして哭つ出つの智大なり。とよい文なを勤しなるの

のまこやさんこなるへと植ちく覗のそむくと篁。野径
乃名翁孔清の流に東蘭に世上志ばすまへく夜いまず
卓爾をとなへそぞ高がふ学乃膺の東乃雨に潤ぶ隠
そうらる風く瀟半みつぞらんなる所ぞ以しまく豪き
火葉翁小をえて氷面み二千の渓乃法師と志ぶ外会と
よちそ翁より上すれしよりらり。宝祇専性窮極乃上
然の恵母又身傍宅よりらうく世を輪画乃みちそて
ね擁と空しま追い万愧と思うぞの光乃おふ深きりて
海写いあり虚何川てりく悦楽もすみ飛まえへやとをふ
法師なりしを蓄て岩慕桃花乃源よりぞ井中よ
沉重歓乃極せひとりわれをまを月を集とふいづ

こ乃人のいかにして身を續小なし果けるぞ。於是て自ハ此
小山霊仙寂宮と人なの名絹ハ高雄乃何某に続り。一と年
三月廿日此山女人禁制なまで。此日計ハゆりをるしにけり。彦
ぞらひしり二人山ぐえに詣けり。いかなりさ前世乃因
縁にや。此僧乃美麗とみるとせんあしけりけるさん身を夢
伽んとする思ふてぞらんせしり力なきと友なる人ふくみ
とりてさまよく鬘乃美なれバ此山の女ハおりぐといひきつれ。
力なく室に帰る。いとりそめ乃ましも人乃雲りの影まさ
露ひ身ハうろき嵯峨によみなしく一念の化せとなり。栄
ことふかの人乃精まそひてうきことぞくも姫ハ枝乃
忍よつくるにも。ぐ雲ふハおりわかしのつとるせれと

哀そ情のほどを隔てずあれなる此乃宮のうちと和たてよ
さる人もなくしぬ我なちなきしくはうるなく世乃人ぞくを恐
しふさなるふ不世の人乃わしきはすべさうなくば鵜飼川
乃暮てそおぶ名をしほ方よりしれね徳より乃山の阿書
自ら乃身の種なるべばなきみのゝ高雄の山とりくろづき
よすがもなかりつゝこの世を後より後の世にちかひて
恨みもびわさね神さにあるあとを悲みに掃ふ人をば情され
と手捨二人のまよひをすればふたのまは月の日のつう
ことりへみつぽ葉なれとて魂のあるを得ながらて蓮の氷
まどうき刀林乃枝よ身をさらく走る自なすまきて
投れ飛乃傍となりて地獄乃かりし助けをうけて縁に波よ

跋祇又云ふみなが門ふ来ゆよゑとすゝひ塞と掘りけるは
いま二人菩提絶乃おもひのおもしゝ身をとゞむのく僧
は男乃身と逃母は僧乃納をおかさきさせりてや数珠
と寿水とうちよせりしに又問うかくえんずるなれて
わりじ地獄乃くげんもうて母や菩云文をいふ由なし
さらに六道乃千里ふひゞくこうづし。僧ふ付ちに浦ながらし
とゞども相かん心ハ地獄よきこく。奥更乃浮かし。尺ゆたく
今はうかうる乃わるまゝふこゝゆ深あり錫とて世ひ人
とひくくまよひくむと見えし無縁と諸生て錫を
かし。又和尚乃大信す。も我で上まちふ。で目
すゞしうん。出家の身ゐハふかくしくも心そへけるで。付

まじひ計激息も僧俗のそうりなさわらひあまべ出浅
まゝしこ業風といふべしとおりうりて二人たに菩薩
ふ入懐経化しし拝強吊給へとゑひのらして祇
ハおけの日多毋語り出

道鮑口

一とせ越前ふ修行ものく飯の海越乃中山なく深く
東よちく海の山をそんとりよなをたくね坂ひとつ越て
どて大乃方の杉山ふ次ぎ細きそ山河乃流走流
深乃蘂蕭うりまこのわう思ひ荒のことなく心方にまつき
と夜汁乃そまいしさずしとげこれ木の谷と眺し了り
ゑかハわて一丈斗の竜ふ大蛇乃首ゐそ耳ハ芭蕉の

ゐる業乃ことゞさするゆゑ不眠ハ鞠のちさしして勇なりて猛く
耳乃りと動まにたるに一寸計乃左の右出入り有乃ゟ
つら乃人悩さといふんかなし。彰樹乃あるりきけて一寸中
とならく事凡雲乃迷ひでくく我と乃まんときをひ害
魂脱りとしく。光てるくとも山逃も返でふけよの樂く我恐て
我乃力となしいハさずゝ度さなまヘバ乃のれで足をふる
まゐらく院よ危気てし兩手。のゝ中よりひとつの鷲
飛おりて蛇乃ゆふを蹴て又中よ入。毒蛇乃よ行
縁するれど不去所矢羽をやり繰りたる不伴の
鷲又飛来てゆふを蹴るゝのわするゝ殺して毒蛇
乃首たちんよそふけ屍谷底へ伸ろび落る。ちる蟷螂

たいくてごも首分寄の室ちくるしとおゆし。皮膚を破て
肉と刻裂くるまぎて膵臓肺つらとそ五臓乃ちひとおりし臍の
下ふ掛打きをたらし方を見あめりそ危気助つる抑あまも
只仏乃加護にこそとせひて
みなとをみつくと力に任て鷲乃業しゅ支とつくく
と云捨して。腕ゟ山上よ行ともむきぬ一

肥之乃蛇七手蛸

肥後乃宗たる浦も須不来ゆて。うしろあく綱し。荻ま房高と
いふ連歌の数寄乃ものにて為入ぬも悦宴数よ去て淡路
乃志河あるより。旅よゐる浦ひろよすけのなれも仏壽を乃歌
友なくて独吟の身くら浦がり到着するとさく嬉しきあそぶ

の松蘿とちぎりしもむなしく悦ちよう後都郡の地
境にして明なバ此まゝでなんといふ不思の云ふ君が行
御や乃んに云ふ私乃案聊を書れ小らう小や須がる男の行を
いふじしもさ存ふせるくぞうの事をしのむつましくらむ。
いやさよ修行のつみそなりしうきや遂バ妻つ云の於わ小かん
としぶ軒なる命よなかぎりなきさ者窟遂乃月ゆすゞろよい
そくよ行りと以へど松蘿のそでとらむ切の志まころかなうなを
嘉し居ねぶある月うらいよ風聲なる宗ぷ小松よ小行肩
とり入一僕小拝させ萩生友なひて。磯づたひ小岩
の岩下かとさくぶ何種の嶽をゆうとくいふいそぶら行不
風年寄乃禅乃さもしさうへゆしを勿とてり。松葉照

乃ひを出しつゝ神と素盞乃尊ありけるやれ八岐大蛇げ不
幸の稲田川のそきしと簸川舘してたくまはへとう
うまありけるが婦よことをまたんがじでもおさ化に數段
去濤も齧しとのひ津げけく海ぞ三つて竃めとり
夏よひとつの山川海に落入て西の二つ人象乃蛇尾の方
東海よつらそひつくと波さしく情しさるをとすら御
りなと再さしよせてく連りて歩かれでふいそぎ數おず
波をうつる有友計伸顔らし下波ふひとりよる西略
二つまさけ次手よこう川よ浅踊よ七つまうろて
去ふ乃いがもよまうとあんえし血蛸し化し鶴の太
ささしら蕑ゞとしそて波上ころ井まくとつまぶそ

ありきて又わ中よ入忠鉄鶴化しで囲氣とありて鑑
海中へ入く蛤とかうとひ縁よ昔を鉄乃纏とうそり
燕の丁魚よ化するとぶ毛をとんる不須周ありさに秋
生茲鶏とお猿夷乃須するはそ又須行うぷ人ろれ仏よ變
ととと鶏ひ約り山坊ぞ腕よ仏よ化する用うありとに
うぞずせうろの付示あると見ひくを在てぶ漏りぬ

或人云市店よ黄鰌百ゞ円まうろうミつ足ちんわう細わり
毛ある蛇の化する物あり鏡とく川へ大きよへ八ま鐵まど後へ入かなし

屍架不浄

羽利乃窮乃川よ游て卸わ名下わる名不へ越ていさ
又所計乃小泉よありて東菜乃量飯乃ゑくてわすらす氣
のあうじい宮中計は男ひさろ乃毋と覚しきぴすれ家乃ほ屍

にぞくとらず守護して蟄居はらづとうりて一般の稀ふ
と、精進を勤行して慶雲くことめぐり行なる横珠しき
るすも懺悔月おもむ無量經さん、ざまじバなかなさ両ハ草の葉
木の根と椎まあり守とて、どかちりさる筆にに記して
常居せ又てざれば山野乃軽妙はよさへかそくりきまされ
かくさみ、いかなるバ常光乃わづけ極樂とひはるへとまさ
ゆる小径むすめりしござさようしてよむ〳〵ひかる。丈いなる
ぞ常光寺といつて、ぐとさへば、わりじ首て廿三町東
海道より一町左へ入あそこる寺なり、是名乃太師乃御作
恭にて飛宝恵の清規とこのしもぎ妻弘乃膝乃色綺に
末久あり、紋なく勤學乃傳侶解なり集り

姑の御堂乃建立方量わしさま依て、ふとく、昇無ぬる
廿去て三乃塔の堂と門との中ろ小乗く硯想をまく
うめく筆此るなし。児嶋貪乃ごとき八葉をれつうなりハ
かとなりし傳法師なれども一夜定メて一心よりけ清浄の記
雲乃なへ此下りぞも傳教まさ法性なく自人、住む日夜に連
聴しなりく傳法と三も不退転して行ふとなかるに、ハ怪き
るすをも守りける物りかな今常にも、へ御扉てる、姉らとも戸
さんとりへバ、母子おさめ欲の傳乃いひはるすやいかまさ成耐
進み出で開きなしむく、つきあくとひ出すなむたを申へ行き、ど
まらうのよ命にを集まれバ、ろうまとこ乃教令生そ得たへバ勧め
と物かたのしまりふせんとすくみつの家よりてみなかいたり

ごく樞おち窓やぶれ霧入樓月乃燈もなく葎も
人獨なんども閑居に住べき所とも見えず後には山高く虎狼
乃ふしどありて妻乞鹿乃聲も哀に遠近乃松檜高く
そびえて蝙蝠枝にかゝれる槻山さらに土室
て清ね乃扉に燈む苔乃むしろに今乃哀のいとさ
とりく時行を揃付て日も漸く暮ねば縁より手洗し
てんとすましぬ案のごとく獨つのことなる不思議の音よりして
呼出こゑとも聲をえもいはれず骨髄に徹て物がなしく歌や
みてしんまきすれば又ある乞食にまちて聲々とまぐれば
たきなる梛の木乃もとよりも又かなたよりも物の影なくて
此地中に呼聲ありてそのまゝ耳を驚してさまよふ

呼計あらはれて縁ながら又もありもして塚をとく
まうそ清浄乃形をとゞめしとくちの一丈の
なるを人乃みく地中より出て向岩我独のりの人
一生不犯乃山伏ありけるとなるとて乎病乃為に
むなしくなりしと聞き衣の徳もとけく清き所
よち入し一基乃主となり卵塔はみじく古き墳わざや
く小野篁彌陀乃ほかを頼むて縁乃字を書よ
ろてふ又不斗堂十余年の間奥より川々く其の地
を指ずる附け増壁法用乃隙となるよりて穴深け
らるに後功なり若ひ文すむとしてなぜも又年ゆく人なき
その墳墓乃碑文まで乃ひ出そどりとうろく人なく自出入

乃るしあつて役利乃ふ筆を添ずけ此拙一屍をとめて云
扨こそ聖人をしえて叫あれば此聖人の後化生と号侍
族をも不ら羅漢羅乃聖人縦令の友を資清浄の
地より紛てくといふ気まゝ我ご命あつく身全きたる
清浄をわしめ何ぞひとり乃息絶へくこの脈とぢくて説
六道衆生よちゝば何のことを仮にあらん夫は禅祥に執とてむなし
いふ神道とは地中に蓄なる一念の我一生
乃門流く持つ令上一度瑕を今の骨肉にも随ほして
二度大名をも明らかせんと丹誠に祈し執身をそ去れ
ずらでちまそてあげてそしとそへは又のく死せりぞさとに執
心より芸九へるうでまし手足も動くして一らん神に着し身を痛

と又問ふハ唐土に在りし時今生にまうでざりしや答へ一
生修する所の飛行自在あり是をもつて本朝に渡り紫中
に飛行する事あまたゝび干年にあまりて内裏仏前寺に遊
ぶ取分小野篁とて又公家の高家に生れ思ひを遂ひて
この娑婆の衆生をたすけ参らせんや諸ともに参りて
さ娑婆に経めぐりけるありしや共にあまく人にうつりて変化をなしける
し都人とはいへど今日の明は又もいつくまでもあり候
さて乃問答の時を以てふけゆく程に寺の鐘鳴て
東の明るを待つ鐘の暁の空も明かりて鶏鳥の
声のみを告げ渡る夢に昔の姿懐しき里人の心悲しく見えし
うつし宿のあるじ里人もおどろきさわぎ集りて稀なる死骸を
見るにまうでし我おもふにあさましくもいさ名所をとけしさて
いかなる事を今昔にありしくの雲路ぬかしこまうで
てみ給へといふはいかにもあやし海山を掛け塵をたて浮雲
ちとせつまる年号乃山伏面影掛かりのあく祈りまする
ところ頭巾涙けさを小豆珠数ひきかけよけりかへりて人
しく去年にて塵国の男鮮乃こと便あらぬふしぎなる
ともある山の廻りの地を越前の国都の姿を見て後に使ひ
にあやしき都の人そ又かの国に終に行方も入滅し仏
法乃地となりしと也

宗祇諸国物語巻之一